復位性関節円板前方転位であったと考えられ，間欠的クローズドロックを伴っていた可能性がある。８の抜歯後から左側の顎関節脱臼が発現していることから，抜歯時の強制開口を機に発現した左側の脱臼が，右側のロックにより習慣化した可能性が高い。ロック解除後には脱臼が発現していないことから，本症例は右側のロックに伴って発現した非協調性の習慣性顎関節脱臼であると考えられた。

12）院内生アンケートによるシミュレーション実習の評価
ー平成13年度と平成14年度との比較ー

○清野　晃孝，釜田　　朗，田代　俊男
志賀　博信，池嶋　一兆，齋藤　高弘
（奥羽大・歯・診科学）

（目　的）　我々は，これまでに平成11年度から臨床実習の中で実施されているシミュレーション実習について各年度末に院内生に無記名のアンケートを行い，本学会で報告してきた。今回は，平成13年度と14年度のアンケート結果を比較し，その問題点の抽出と本年度の改善点について報告する。

（方　法）　対象は平成13，14年度の院内生で，V.A.S法により22から25項目のシミュレーション実習アンケートを実施した。

（結果および考察）　ほとんどのアンケートの項目で平成14年度は，平成13年度と比較して低い評価を受けた。その原因として，①我々医局員側の実習に対する取り組み方を謙虚に反省することは必要と考える。②平成14年度の実習は，必要検印数の増加などケースを厳格にしたため，実習に追われる感覚から積極性が減少したことを反映した。③平成14年度のVASは向かって左を10点とした形態に改めたため，記載する右手が左から右に動く自然さから値が低く出たものと推察した。年度末の試験結果は，冠橋義歯の実技試験と修復の筆記試験および有床の筆記試験の３項目で有意に成績は向上した。すなわち，シミュレーション実習における院内生からの評価は低くなったものの，成績は向上したという興味深い結果を得た。平成15年度の改善点として，保存修復学系実習では，実習書の改善を図り対象歯を絞り，集中した実習を行っている。歯内療法系実習では，内容を人工歯の抜髄，根管充填，天然歯の根管口明示に限定した。冠橋義歯学系実習では，実習書の更なる充実をはかりメタルコアーからMBクラウン作製にいたる一連の臨床操作に焦点をあてている。有床義歯学系実習では実習時間が１日で連続した期間のため，時間を有効に利用できるように努め，毎回の到達目標を明瞭にしている。